

怒りの感情とその反応について

—Averill の質問紙による調査：

怒りの動機と反応の関係を中心として—

大 平 英 樹

On the Emotion of Anger and Its Responses

—A Study Through Averill's Questionnaire: Focusing on Relationships between Motives and Responses—

Hideki Ohhira

The purpose of this study was to investigate the structures of motives and responses of anger and their relationships through Averill's questionnaire "Everyday Experience of Anger". The remarkable results were as follows.

1. There were three factor dimensions in the motives of anger. They were interpreted as evasive, instrumental, and hostile motives.
2. There were four factor dimensions in the responses of anger. They were interpreted as direct aggression, displaced aggression, suppression of anger, nonaggressive problem-solving.
3. Hostile motive was likely to arouse direct aggression. Instrumental motive was likely to arouse direct aggression or displaced aggression. Evasive motive was related to none of four responses.

問 題

我々は日常の様々な場面において、怒りの感情を経験する。また、それによってなんらかの攻撃的な行動を発動することも多いであろう。攻撃性は人間の基本的な属性のひとつであり、それ自体は必ずしも不適応なものではないかもしれない。しかしながら、怒りによって生じられた攻撃動因が、犯罪などの反社会的行動を導いたり、人間関係に亀裂を生

じせしめたりする可能性も否定できない。事実、傷害や殺人などの暴力犯罪の多くは、衝動的な怒りが原因であるという報告もなされている (Toch, 1969)。

社会心理学における攻撃研究は、このような攻撃のネガティブな側面を抑制、コントロールしようという動機から始められたと考えることができる。そして60年代から現在に至るまでに数多くの研究が行なわれ、有益な知見が積み重ねられている。ところが、これら

の研究の多くは実験的研究であり、個々の規定因の検討・同定には有効であったものの現実場面への適応が困難であるという欠点があった。そこで最近では、より現実場面に即した研究が望まれている。本研究はそのような動向をふまえつつ、調査の方法によって日常の場面での怒りの感情とそれに伴う反応・行動との関係を検討することを目的としている。

社会心理学における攻撃研究においては、怒りは攻撃を生起させる重要な要因のひとつであると考えられてきた。怒りを要因として組み込んだ攻撃行動のモデルを最初に提唱したのはBerkowitz (1962) である。彼のモデルでは、怒りは攻撃の準備状態を形成するものとしてとらえられていた。すなわち、まずさまざまな内的・外的原因によって他者に対する怒りが生起すると、攻撃行動を発動する準備がなされる。そしてそこに攻撃手掛かりが与えられると実際の攻撃行動が行なわれる、というわけである。この場合怒りの程度が強ければ、それだけ攻撃行動も激しいものになると考えられていた。以後の研究においても、こうした怒りの機能は暗黙のうちに認められてきたと考えることができる。攻撃衝動とか攻撃傾向といった用語で表現される概念も、Berkowitz のいう怒りとほぼ同じものと解釈することができるだろう。

しかしながら現実場面での怒りという感情を考えた場合、こうしたとらえ方だけでは不十分であることは事実であろう。怒りという感情自体が単相的なものではなく、複数の次元から構成されている可能性は否定できない。また怒りは必ずしも攻撃とのみ結びつくわけではなく、それ以外の様々な反応をも同時に生起させるはずである。こうした問題に対処するために、Averill (1982) は情動を反応症候群 (response syndrome) とみなす考え方を援用している。この説はLazarus (1968) によって提唱されたもので、情動を経験する場合、認知、動機づけ、生理、表出、などの各水準において反応が起こり、しかもそれらが有機的に関連していると主張される。この反

応症候群の考え方をもとに、Averill (1978) は怒りの感情を各水準で測定する質問紙を作成した。彼はエピソード法という手法を採用しており、質問紙の最初において被験者自身の怒りの経験を想起させて回答させるようになっている。そしてそこに含まれる質問項目は、怒りの対象、原因、被害、反応、動機など多岐にわたっている。現在この質問紙は大淵・小倉 (1984) によって和訳され、研究が進められている。彼等は社会人と学生を対象とした調査を行ない、怒りの動機の構造とそれに影響を与える要因 (大淵・小倉, 1985)、怒りの反応の規定要因 (大淵, 1986) などについて分析を行なっている。

本研究でもこの質問紙の日本語版を用いて、調査研究を行う。本研究では主として怒りの動機と反応について着目し、以下の点について検討したい。

1. 怒りの動機にはどのような構造がみられるか。この場合「怒りの動機」とは、「怒りによってどのような動機づけが生起されたか」ということを指す。動機と場う場合には「何故怒ったか」という問題を指すこともあるが、それについては先行研究にならって「怒りの原因」と呼ぶことにする。この怒りの動機においてどのような因子構造がみられるかを検討し、先行研究の結果と比較したい。
2. 怒りの反応にはどのような構造がみられるか。本稿では、認知的・生理的反応は除外し行動的な反応のみを問題とする。
3. 怒りの動機と反応の間にどのような関係があるか。特定の動機は特定の反応を生起させるといえるか否か。

方 法

1. 被 験 者

大学生100名を対象とし、そのうち男子は39名、女子は61名であった。被験者の年齢は18歳から24歳の間に分布している。調査はすべて無記名で行なわれた。

2. 質 問 紙

Averill (1978) が作製した「怒りの経験」質問紙¹⁾を和訳したものを使用した。この質問紙はエピソード法という手法を用いたものであり、被験者に過去一週間のうちで経験した最も激しい怒りを想起させ、それに関する質問に評定させるというものである。怒りの経験の想起にあたっては、可能なかぎりその出来事の細部まで思い出すように求め、それを自由記述させた。

質問項目は次のような構成になっていた。

(A) 怒りの想起— 1. 過去一週間の怒りの回数, 2. 過去一週間の最も激しい怒り, 3. 怒りの程度 (1-10の10段階評定), 4. 現在の怒り, 5. 経過日数

(B) 怒りの対象— 1. 対象の種類, 2. 対象の性別, 3. 対象との関係, 4. 対象の年齢.

(C) 怒りの原因— 1. 対象の害意, 2. 対象の合理性.

(D) 被害— 怒りを引き起こすことになった出来事において、被験者がどのような被害をこうむったか、次の6項目に関してたずねた。各項目は「ひどくうけた」、「少しうけた」、「全くうけていない」の3件法で評定させている。

1. 身体的損傷, 2. 経済的損害, 3. 欲求不満²⁾, 4. プライド損傷, 5. 道義違反, 6. 期待を裏切る.

(E) 怒りの反応— 怒りによって生起させられると考えられる反応のうち、生理的変化などの非随意的反応以外の行動的な反応を以下の11項目についてたずねた。これらの項目に関しては、「実際にその反応を行なった」という実行水準と、「その反応をしたかった」という願望水準に分けてたずねた。各々の水準について「強く行なった」、「弱く行なった」、「しなかった」; 「したかった」、「少ししたかった」、「したいと思わなかった」の3件法で評定させている。1. 身体的攻撃, 2. 利益停止, 3. 怒りと反対の表現, 4. 言

語的攻撃, 5. 相手との冷静な話し合い,

6. 相手の大事なものへの攻撃, 7. 告げ口, 8. 心を鎮める, 9. 人に八つあたり, 10. 物に八つあたり, 11. 第三者と相談.

(F) 怒りの動機— 怒りを経験した際に被験者がどのようなことを望んだか、つまり、怒りによってどのような反応、行動が動機づけられたか、を以下の11項目についてたずねた。各項目は「心の中にあつた」、「少し心の中にあつた」、「全くそんなことはなかった」の3件法で評定させている。1. (相手に) 前にされた事の仕返しをしたかった, 2. 今度の出来事について相手に仕返しをしたかった, 3. 相手のために何かをすることから逃れたかった, 4. 自分(被験者)のために相手にあることをさせたかった, 5. 彼(相手)自身のために相手の行動を変えさせたかった, 6. あなた(被験者)自身のつごうで、相手の行動を変えさせたかった, 7. 相手との関係を断ち切りたいかった, 8. 相手との関係を強めたかった, 9. 自分をよく見せようと思った, 10. 相手に対して、ふだんからいやだと思っている気持ちを伝えたかった, 11. 今度の出来事とは関係ない、日ごろのうっぶん晴らしをしたかった.

結果³⁾と考察

1. 怒りの経験の概要

動機と反応について検討する前に、被験者たちの怒りの経験がどのようなものであったかを簡単に確認しておくことにする。

被験者が経験した怒りの激しさを1-10の10段階で評定させたが、その結果は平均6.72分散は5.91であった。そして被験者全員のうち42%がそのことについて今でも怒りを感じると報告している。これをみるかぎり、本調査の対象となった人々はかなり強い怒りを経験していると考えられることができる。

怒りを感じた対象については、90%の被験

者が人間であると報告している。そのうち43%が男性で35%が女性であるとされている。残りの22%は対象が複数であり、男女の区別がつかない例である。また怒りの対象である人々のうち、家族・恋人・友達などのよく知っている人が67%で、あまり親しくない人や見知らぬ人は26%にすぎない。怒りという感情が他者との相互作用の中から生まれてくるものである以上、そもそも相互作用の量が多い親しい人物に対して怒りを感じる人が多いのは当然であるといえよう。さらに対象と被験者との年齢関係を調べてみると、自分より年上の人に対して怒りを感じた例が49%と最も多かった。同年輩に怒りを感じたのは35%で、年下の人に対して怒りを感じている例は7%と少なかった。

2. 被害・怒りの動機・怒りの反応

怒りを経験した事態において、どのような被害を受けたかを6つのカテゴリーで評定させている(複数回答)。その結果をTable 1に示す。最も多いのは「期待に背く(80%)」である。続いて「道義に背く(69%)」「欲求不満(65%)」「プライド損傷(61%)」が多く、「身体的損傷(4%)」や「物質的被害(18%)」を受けたと評定した人は少なかった。これをみるかぎり、日常場面においては、怒りは客観的・実質的な被害よりむしろ精神的被害によって生起されやすいと考えることができよう。また実験的な攻撃研究の知見にみられるように(Nesdale, Rule, & Mcara, 1975; 大淵, 1982など)、同じ身体的損傷や物質的被害でも、そこに不合理的動機や道義違

Table 1 怒りを導いた被害(複数回答)

被害のカテゴリー	回答率
身体的損傷	4%
物質的被害	18%
欲求不満	65%
プライド損傷	61%
道義に背く	69%
期待に背く	80%

反という意味が含まればより激しい怒りを生起させやすいのではないかと考えられる。

次に、怒りを感じたときどのような動機づけが生じたかを検討する。Table 2は11の怒りの動機のカテゴリーの回答率を示したものである(複数回答)。最も多かったのは「自分のための行動規制(57%)」であり、ついで「相手のための行動規制(41%)」「別の期待(41%)」「嫌悪の伝達(41%)」などが多かった。こうした怒りの動機によって様々な反応・行動が導かれると考えられる。Table 3はそのような怒りの反応の、11のカテゴリーの回答率を表わしている。各カテゴリーについて、そうしたかったという願望の水準と実際にしたという実行の水準に分けて評定させた。どのカテゴリーについても、願望率の方が実行率

Table 2 怒りの動機(複数回答)

動機のカテゴリー	回答率
関係解消	33%
責任回避	32%
別の期待	41%
自分のための行動規制	57%
うっぶん晴らし	18%
相手のための行動規制	48%
プライド保持	39%
関係強化	36%
過去の罪への仕返し	26%
単純な仕返し	32%
嫌悪の伝達	41%

Table 3 怒りの反応(複数回答)

反応のカテゴリー	願望率	実行率
身体的攻撃	29%	1%
他の罰	54%	38%
言語的攻撃	20%	36%
相手の大事なものへ攻撃	47%	26%
人に八つ当たり	16%	3%
告げ口	65%	32%
ものに八つ当たり	16%	16%
心を鎮める	20%	12%
怒りと反対の表現	68%	59%
冷静な話し合い	35%	30%
第三者に相談	56%	48%

より高いことが分かる。特に「身体的攻撃」は29%の人に願望されているのに実行したのはわずかに1%にすぎない。他にも「相手の大事なものへの攻撃」「他の罰」など攻撃的な反応は、いずれも願望率に比べて実行率が低いことがうかがわれる。攻撃的反応は多少なりとも反社会的意味を含んでいるので、たとえ願望されたとしてもすぐに実行されるわけではなく、様々な状況や文脈を考慮して実行が決定されると考えられる。ただし「言語的攻撃」だけは別で、願望率よりも実行率の方が高くなっている。これは思わず強い口調になってしまったり、感情的になって怒鳴ったり叫んだり、という反応も含まれているせいだと思われる。そうした反応は衝動的なものであり、あらかじめそうしようと動機づけられたものではないのであろう。実行に移された反応で多かったのは、「怒りと反対の表現(59%)」「第三者に相談(48%)」「冷静な話し合い(30%)」というむしろ非攻撃的な反応であった。

3. 怒りの動機と反応の因子分析

怒りの動機がどのような構造を成しているかを検討するために、動機の11のカテゴリーについて、因子分析を行なった。主因子法によって3因子を抽出し、これにバリマックス回転を施した。この結果をTable 4に示す。第

Table 4 怒りの動機の因子分析

動機のカテゴリー	因子負荷量		
	1	2	3
関係解消	.71		.25
責任回避	.65		
別の期待		.70	
自分のための行動規制		.63	
うっぶん晴らし		.33	
相手のための行動規制		.31	
ブライド保持	.15	.24	.11
関係強化		.18	
過去の罪への仕返し			.68
単純な仕返し	.19		.55
嫌悪の伝達	.30	.33	.45

1の因子は、「関係解消」と「責務回避」から成り立っている。これは怒りの対象たる相手との対人関係を断ち切り、その場から逃れたという動機であると考えられる。そこでこの因子を逃避的動機因子と呼ぶことにする。第2の因子は、「別の期待」「自分のための行動規制」「うっぶん晴らし」「相手のための行動規制」など、なんらかの利益や期待の達成を目的とする動機であると考えられよう。この因子はAverill (1982) や大淵ら (1985) の研究とほぼ同じ項目から構成されている。そこで彼等にならって、これを道具的動機因子と呼ぶ。第3の因子は「過去の罪への仕返し」「単純な仕返し」「嫌悪の伝達」など、怒りの対象への報復や嫌悪感の表現を目的としており、敵意的動機因子と呼ぶことにする。

同様に怒りの反応についても、主因子法、バリマックス回転によって因子分析を施した。

Table 5 怒りの反応の因子分析

反応のカテゴリー	因子負荷量			
	1	2	3	4
身体的攻撃	.68			
他の罰	.63	.24		
言語的攻撃	.56			
相手の大事なものへの攻撃	.49			-.21
人に八つ当たり		.46		
告げ口		.45		
ものに八つ当たり		.15		
心に鎮める			.79	
怒りと反対の表現			.45	
冷静な話し合い				.68
第三者に相談				.28

Table 5はその結果である。怒りの反応は願望水準と実行水準に分けて因子分析を行なったが、ここでは実行水準についての結果のみを掲げている。反応については4つの因子が抽出された。第1の因子は「身体的攻撃」「他の罰」「言語的攻撃」「相手の大事なものへの攻撃」など、怒りの対象へのさまざまな形式の攻撃を示す、直接的攻撃因子と考えられる。第2因子は「告げ口」や「やつあたり」が特

微的なので、これは攻撃転化因子と呼ぶことにする。第3因子は「心を鎮める」や「怒りと反対の表現」という反応から成っており、怒りの抑制因子と呼ぶことにする。第4因子は「冷静な話し合い」と「第三者に相談」という反応によって特徴づけられる非攻撃的解決因子である。怒りの抑制因子と非攻撃的解決因子の違いは、前者は怒りの情動を行動として外に表わさず、もっぱら個人内部に押し込めようとする反応を代表するのに対して、後者はむしろ積極的に怒りの解決を図ろうとする反応を代表していると解釈できる。

この結果は実行水準のものであるが、願望水準の因子分析の結果もほぼ同様な傾向を示していた。反応における因子構造は両水準を通じて共通していると思われる。

4. 怒りの動機と怒りの反応の関係

動機と反応がどのように関係しているかを検討するために、両者の相関を算出した。動機と反応の実行水準の各項目について個人の因子得点を算出し、これを指標として用いている。その結果をTable 6に示した。これをみ

Table 6 動機と反応の相関

動 反 應	機 動		
	逃避的動機	道具的動機	敵意的動機
直接的攻撃	.08	.25*	.31**
攻撃転化	.08	.28**	.17
怒りの抑制	.15	.23*	.07
非攻撃的解決	-.08	.13	-.03

** $p < 0.1$

* $p < 0.5$

ると、まず3つの動機のうち逃避的動機は各反応とあまり相関していない。怒りの抑制との間にやや関係が示唆される程度である。

これに対して道具的動機は非攻撃的解決以外のすべての反応と相関が高く、この動機は攻撃を含めた様々な反応を導くことを示唆している。道具的動機は、相手からなんらかの利益や自分（ときには相手自身）に都合のよい行動を引き出そうとするものである。そこで、そのときそのときの目的に応じて、その

目的に最も適していると思われる反応が導かれると考えられる。すなわち、個人が相手に対して直接攻撃を行なった方が目的が達成されやすいと考えれば、様々な形態の攻撃的行動が発動される。しかし同じように怒りを経験した場合でも、攻撃を抑制したり、非攻撃的解決を図る方が目的が達成されやすいと考えられれば、そのような反応が生起されるのである。一般に、怒りという感情は衝動的で激しいものであると受け取られている。そこには冷静な判断や思考は働かないようにも思われている。しかし本研究の結果によれば、怒りの感情が生起している際にも、個人はある場合には自身の目的やその達成方法について、様々な認知的判断を行なっているのではないと思われる。

また、敵意的動機に関しては特に直接的攻撃と相関が高いことがみてとれる。他の2つの動機と比較しても直接的攻撃との関係は最も強い。この結果から、敵意的動機は確かに攻撃的反応を導きやすいといえるだろう。この動機は他の反応とはほとんど関係しておらず、攻撃転化とわずかに関係がうかがえる程度である。よってこの動機はほぼ一義的に攻撃的反応と結び付いていると考えることができる。ちなみに、敵意的動機の因子得点と直接的攻撃の願望水準の因子得点との相関をとってみると、.44 ($p < .001$) と実行水準より高かった。これは実際の攻撃的行動の発動が敵意的動機のみによって決定されるのではなく、他のさまざまな要因が介在している可能性を示唆するものである。それはおそらく、怒りの対象との力関係や将来的なかわりの見通し、あるいは攻撃を行なうことについての適当さの判断などの要因であると思われる。これらの要因についても、その一部は本調査の質問項目に入っている。それらの攻撃的反応に与える影響については今後の分析を待つていただきたい。

討 論

本調査において被験者が報告した怒りは、

その多くが激しいものであった。10段階評定で平均が7に近く、かつ全体の4割以上が現在に至るまで怒りの感情を持続させているという結果は、調査前の予測を大きく上回るものであった。そして、報告された怒りはそのほとんどが特定の他者に対するものである。しかもそれは好悪の別はともかくとしても、なんらかの形で日常的にかかわりを持っている他者である場合が多かった。これらの事実は、現代の学生が特に人間関係において我々の予想以上に「怒る」事態を頻繁に経験していることを示唆している。怒りは現代社会においてむしろポピュラーな感情であるということができよう。そして怒りは直ちに攻撃的行動や、人間関係の破壊を導くわけではなく、怒りを経験した個人は状況に応じて様々な反応を使いわけているということが明らかになった。

一般に怒りはストレスフルでネガティブな感情であると考えられている。しかし、本調査の結果のごとく、ごく日常的な感情・経験であることを考えると、そのような一義的なとらえかたは、あまり生産的ではないように思える。むしろ怒りを対人機能という面からとらえ、その動機や反応を総括的に検討することによってその機能を明らかにしていくことが必要なのではないだろうか。攻撃的行動にしても、怒りによって生起させられる単一の行動として考えるよりも、他の様々な行動の選択肢の中のひとつと考える方がよさそうである。なぜならば、本調査で明らかになったように、攻撃は単に相手に危害を加えるという目的・動機だけから行なわれるものではないからである。むしろ攻撃を行なうことによって相手の行動を変化させたり、自分のプライドを回復したりという様々な動機がその背景にある。実験的な攻撃の研究においては、攻撃を規定する要因の個別的検討が進められてきたが、そうした方向と平行して対人機能という面に着目した現実場面における攻撃行動の様相をも検討していく必要があるであろう。本研究は、筆者のそのような目的のための最

初の段階であると考えている。

本研究では、特に怒りの動機と反応がどのような構造を成しているかということに着目した。このうち動機に関しては、逃避的動機因子、道具的動機因子、敵意的道具因子、の3つの因子による構造が示唆された。この3つの因子のうち、今後さらに検討を要するのが道具的動機因子である。この動機は相手に危害を与えること以外のすべての目的をふくんだものであり、その範囲は非常に広い。そこでさらに目的のカテゴリーを分類して、各々のカテゴリーについて反応との関係を検討するという課題が残されている。また道具的動機因子は、他の2因子よりも状況的要因の影響を受けやすいと考えられる。よってこの因子については、反応を動機という個人的要因のみで説明するのは無理があるであろう。動機と状況的要因の相互作用がどのように反応を規定していくかについても、今後の研究を持たねばならない。

また、怒りの反応については、直接的攻撃攻撃転化、怒りの抑制、非攻撃的解決という4つの因子による構造が明らかになった。このカテゴリーは、怒りを感じた際の反応についての直感的理解ともよく対応している。これら反応のカテゴリーの中では、非攻撃的解決がいずれの動機とも相関がなかった。非攻撃的解決は、願望水準、実行水準ともに比較的回答率が高い反応である。Table 3によれば、少なくとも現実の場面では、非攻撃的解決は直接的攻撃と同じくらいには起こりうる反応である。そうした反応に動機との相関がみられなかったのは、この反応が数多くの要因によって規定されていることを表わしているのかもしれない。参考のために、非攻撃的解決と11の動機項目各々の得点の相関を求めた。いずれの動機項目とも特に高い相関はみられなかったが、関係強化(.24)と相手のための行動規制(.21)に有意な正の相関があった。また、10段階で評定させた怒りの激しさとは無相関であった(.03)。この結果から考えると、対象に好意を持っており、将来的にも

肯定的にかかわっていこうとする場合には怒りの激しさに関係なく非攻撃的解決の反応が起りやすいのではないと思われる。

残りの3つの反応カテゴリーについては、少なくともひとつの動機と相関していた。特に直接的攻撃については、道具的動機と敵意的動機の両方と相関している。これは攻撃行動には単に相手に危害や苦痛を与えようとするものと、攻撃を通じてなんらかの利益や目的を追及しようとするものがあることを示している。これは従来からの攻撃研究における主張と整合するものである(Feschbach, 1964; Zillmann, 1979)。このように、従来実験的な研究の枠組みの中で得られた知見を、調査的手法によって現実場面の中で実証していくことは意義のあることだと思われる。

引用文献

- Averill, J. R. 1978 *Anger* In H. Howe & R. Dienstbier (Eds.) Nebraska symposium : on emotion, vol. 26. Lincoln : University of Nebraska Press.
- Averill, J. R. 1982 *Anger and aggression : An essay on emotion*. New York : Springer-Verlag.
- Berkowitz, L. 1962 *Aggression : A social psychological analysis*. New York : McGraw-Hill.
- Feschbach, S. 1964 The function of aggression and the regulation of aggressive drive. *Psychological Review*, 71, 257-272.
- Lazarus, R. S. 1968 *Emotions and adaptation : Conceptual and empirical relations*. In W. J. Arnold (Ed.) Nebraska symposium on emotion, vol. 16. Lincoln : University of Nebraska Press.
- Nesdale, A. R., Rule, B. G., & Mcara, M. 1975 Moral Judgment of aggression : Personal and situational determinants. *European Journal of Social Psychology*, 5, 339-349.
- 大淵憲一 1982 不合理な欲求不満に対する攻撃反応と原因情報 犯罪心理学研究, 19, 11-20.
- 大淵憲一 1986 質問紙による怒りの反応の研究 : 攻撃反応の要因分析を中心に 実験 社会心理学研究, 25, 2, 127-136.
- 大淵憲一・小倉左知夫 1984 怒りの経験(1) -Averillの質問紙による成人と大学生の調査概況- 犯罪心理学研究, 22, 15-35.
- 大淵憲一・小倉左知夫 1985 怒りの動機-その構造と要因及び反応との関係- 心理学研究, 56, 200-207.
- Toch, H. 1969 *Violent men*. Chicago : Aldine.
- Zillmann, D. 1979 *Hostility and aggression*. Hillsdale, New Jersey : Lawrence Erlbaum Associations.

脚注

- 1) 「怒りの経験」質問紙・日本語版は、大阪教育大学の大淵憲一先生作製のものをご好意により使用させていただきました。記して感謝の意を表明いたします。
- 2) 攻撃研究でいう「欲求不満」とは、「遂行中の行動が妨げられること」と定義されている。一般的な意味とは多少違いがあるので注意を要する。
- 3) 本研究のデータ分析は、東京大学大型計算機センターにおいて、そこに収録されているSP-SSを用いて行なった。